

# 山口県

## 街道 1

全国でも山口県にしかないものが、石積の一里塚である。長州藩は独自に藩内の主要道・地方道に三百箇所を超える一里塚を築造したが、その構造については藩が定め、それと異なる塚は再構築するよう命じたとされる。構造は1間四方と小型だったため、崩壊防止のため表面を石で補強し、塚木は植えずに中央に木柱を建てた。石造のため全体に保存状態は良好で、山中にあるものも他県の土塚と違い雑木で覆われることもなく視認できる。陶峠下一里塚（山口市、江戸初期、市史跡）**B**〔下の写真〕、早尾坂漆ヶ坪一里塚（岩国市、江戸初期、市史跡）**B**、小野一里塚（下関市）江戸初期、市史跡）**B**などが典型である。



## 街道 2

山口のもう一つの大きな特徴は石刳橋の存在である。石刳橋は他の県にも若干存在するが、山口ほど集中的に造られた地域は他にない。国内最古は岡山県の水迫橋（1709）だが、山口県では日本海側の盤石橋（長門市、宝暦 14（1764）、県史跡）**A**をルーツとするタイプと、瀬戸内側の枡築欄干橋（防府市、明和年間（1764-72））**A**をルーツとするタイプが、ほぼ同じ頃から造り始められている。

日本海側の盤石橋（右上の写真）や平安橋は玄武岩で造られ、刳石、桁石とも厚く短い。また、盤石橋は石刳橋としては国内に2例しかない2径間橋である（もう1例は、岡山の藤田の石橋）。



瀬戸内側では、塩田の水路用により背の高い石刳橋が量産された。最も完全な形で姿を留めているのが枡築欄干橋（下の写真）である。花崗岩で出来ているため全体にシャープで、無駄な石材もなく、“よく宙に浮いているな”と思わせる。このタイプの橋は、防府市に3橋、山口市に1橋、柳井市に1橋残っている。



第3のタイプの石刳橋が、住吉神社参道橋（宇部市、嘉永5（1852））**A**〔写真は次ページ〕、山の口橋（防府市、江戸期）**B**、文島竜神社の太鼓橋（平生町、江戸期）**B**の3橋で、最も洗練されたタイプの石刳橋である。すなわち、全体としては端正な太鼓型の石橋だが、石材は3つに分かれ、両岸に打ち込まれた刳石の先端とその上に載る石桁は、「相じゃくり」風に継がれて連続性を保っている。

## 街道 3

石橋の3番目は山口県でも萩市内に限定して存在するきわめて特異なグループであり、ここでは「装飾石橋」と名付ける。この種の石橋で現在確認されているものは、毛利家の墓所ある大照院門前橋**A**〔次ページ左下の写真〕、大照院墓所前橋**A**、大



照院初代墓所前橋 **A**、東光寺の瑞雲橋 **B**、金谷天満宮の桁橋 **B** の5橋のみである。いずれも年代は不明だが、最後を除き毛利家の墓所への橋であるため、墓所が造られた明暦2(1656)〔大照院〕、元禄7(1694)〔東光寺〕頃に架橋された可能性が高い。ところで、これらの橋には、端部を刳石で支えている部分があるが、ここでは刳橋として分類しない。理由は、刳石を使用する目的が、橋の径間を長くするためではなく、下の写真の右から2列目の橋面石の手前部分に見られるように、端部の石材を装飾的に配置するためだからである。

さて、もう一度下の写真を見ると、右から1列目と3列目の桁石が途中で切れている。しかし、橋自



体は単径間で中央に支柱はない。この一見不可能な構造がどうして崩壊しないかは裏面を見ないと分からない。下の写真の右に添えたものは、裏面を撮ったものだが、“2つに切れた”桁石の両側面が、両隣の“切れ目のない”桁石の側面に「ほぞ」の形で喰い込んで固定されている状況が見て取れる。結果として、こうした複雑な加工により、一見不可能な構造が実現する。さらに、先に述べたように右から2列目の刳石で支えられた2つの石片もある。こうした工夫、抑制された端正な美意識すら感じさせる卓越した発想が、誰により何の目的で行われたかは分からない。ただ、小規模橋とはいえ、世界で他に例を見ない機知に富んだ優れた石橋であることは確かである。

#### 街道 4

山口の街道遺産には橋が多く、後になるほど独自色が強くなるが、4番目は世界に冠たる名橋・錦帯橋(岩国市、延宝6(1678)、国名勝) **A** である。山梨県の解説で、錦帯橋は江戸期代の三奇橋の一つと書いたが、それは猿橋を語るためであって、錦帯橋を語るには余りにも矮小化された評価である。広く世界を見た場合、木造アーチは歴史上3回しか造られなかった。何れも異なる形式、異なる時代、異なる文明である。最初は、11世紀中頃の中国・北宋で考案された「2ヒンジ連接アーチ橋」で、代表作は汴京の虹桥である。2番目が、延宝元(1673)に創建され、延宝6(1678)に鞍木で補強され現在の姿になった錦帯橋の「半固定持ち送り風アーチ橋」である。3番目は、18世紀中頃にドイツとスイスを中心に活躍したグルーベンマン兄弟の「ハウトラスと



集成材アーチの合成橋」である。これらのうち、最古の北宋のアーチ群は現存しない。従って、定期的に架替えられているとはいえ、17世紀と同じ姿を見ることができる「現存する世界最古の木アーチ橋」の栄誉は錦帯



撮影：馬場俊介 (2004.3.19)

橋に与えられる。錦帯橋が橋梁史の分野で世界的に有名な理由はそこにある。

錦帯橋のルーツについては、よく「明の帰化僧・独立性易」「杭州の西湖にある6径間のアーチ橋」などが引き合いに出されるが、こうした解説は誤解を招きやすい。西湖の橋は、連続太鼓橋という発想につながったことは確かだが、世界で唯一無二の特異な木アーチ構造と、近世日本で唯一の堅固な木橋用石橋脚の具体的構造のヒントになったわけではない。その功績はひとえに大工棟梁であった児玉九郎右衛門に帰せられるべきである。しかし、彼がどのようにしてこの着想を得るに至ったのかは謎である。

## 舟運 1

山口の地勢的な特徴は三方を海に囲まれているという点で、近世・近代を問わず、多くの防波堤が造られ、現在でもそれらが最も多く残っている県である。しかも、地域による採れる石材が異なるため、場所によって様々な色合いの防波堤が見られるという特徴もある。近世に限定すれば、花崗岩で出来た家室洲崎防波堤（周防大島町、文化 14 (1817)）**B**と、萩の黒石で出来た恵美須ヶ鼻波止（萩市、安政



撮影：馬場俊介 (2000.10.7)

3 (1856) 以前) **B**〔左下の写真〕が良好に保存されている。黒い石で造られた防波堤は全国でもここだけである。

## 舟運 2

住吉神社の石灯台（防府市、文久 3 (1863)、国史跡）**A**は、兵庫県の明石港旧灯台（1657）などと並び、国内に5基しかない灯明台型の石灯台の一つである。



提供：防府市教育委員会

## 農業 1

山口の農業遺産で全国的に有名なものは干拓樋門である。岡山同様すべて花崗岩製の樋門だが、外観は大きく異なっている。代表的存在は、高泊開作浜五挺唐樋（山陽小野田市、寛文 10-11 (1670-71)、国史跡）**A**〔下の写真〕、名田島新開作南蛮樋・四挺樋（山口市、安永 3 (1774)、国史跡）**A**、尾津開作南蛮樋（岩国市、文化 6 (1809)）**B**などだが、何れも締め切り堤防を切って造られた樋門最下部の門扉上に、江戸時代としては異例なほど精緻に整形加工された花崗岩の梁を壁のように積み上げており（高泊開作では5段、名田島新開作では4段、尾津開作では8段）、他地域では見られない特徴になっている。



撮影：馬場俊介 (2008.4.12)

## 農業 2

山口でしか見られないもう一つの農業遺産は、赤崎神社の楽栈敷（長門市、16 世紀末、国有形民俗）**A** である。小豆島の栈敷と形態は似ているが、赤崎神社では、牛馬の悪病平癒を祈願して叶えられたことを感謝して奉納された楽踊がきっかけとなり、江戸時代に農村で人気のあった歌舞伎芝居を眺める場として整備されていった点が異なっている。



提供：長門市教育委員会

## 林業 1

山口には全国でも稀な林業遺産、佐波川関水（山口市、文治 2(1186)、国史跡）**A** がある。治承 4(1181)に焼失した東大寺の大勧進職となった重源が、再建用の巨大な木材（長さ 39m、径 1.6m）を佐波川の奥地から運び出す際に、川を堰き止めて水位を上げ、川底に平石を敷き詰め、材木が円滑に流れるよう工夫したもので、118 ヶ所造られたとされる「関水」のうち、現在、第一と第二のみが残っている。重源の佐波川を通じた木材搬出事業の遺産としては、もう一つ、搬出に係わった人夫の疲労回復のための石風呂群も存在も重要だが、こちらは**衛生**の方で取り上げる。



撮影：馬場俊介（2008.4.11）

## 産業 1

山口には江戸中期の伝統的なたたら製鉄の代表的遺構と、幕末の洋式製鉄の代表的遺構の 2 つが存在する。前者は、大板山たたら製鉄遺跡（萩市、宝暦年間・他、国史跡）**A** で、砂鉄の洗場、炉のあった高殿ほか、事務所や炭焼窯などの関連施設が広い敷地内に残り、よく整備されている。製鉄場が東石見の鉄山師・高原竹五郎により 3 度目に操業を開始した翌年の安政 3 (1856)、恵美須ヶ鼻造船所で建造された洋式軍艦「丙辰丸」（帆船）に、ここで作られた鉄製品（大砲ではない）が使用された。日本古来の製鉄技法と、西洋の近代船舶との結び付きがユニークであり、幕末期の技術のあり方を示す好例と言える。大板山のたたらは、出雲で多く見られる「砂鉄持ち込み方式」の製鉄所であり、砂鉄の全量を石見から持ち込み、現地の豊富な木材を使って製鉄を行っていた。ただ、砂鉄は奈古の港から牛で運び、完成した鉄製品も同港まで運んだとされるが、港から遠い標高 260m の山中までどのような経路で運ばれていたかは不明で、牛が通れるような道路遺構も発見されていない（これに比べ、出雲の越堂たたらは海からわずか 1 キロ余の場所に設けられた）。



提供：萩市歴史まちづくり部

2 番目は萩反射炉（萩市、安政 3 (1856)、国史跡）**A** と郡司鑄造所遺構（萩市、文久 3 (1863) 以前）**B** である。萩藩は安政 2 (1855)、鉄製大砲の鑄造法習得のため、既に実用炉を稼働させていた佐賀藩に、大工棟梁・小沢忠右衛門らを派遣するが、反射炉の技術伝授を謝絶される。小沢は反射炉の現物を見学して図面を作成、それに準じて翌安政 3 (1856)、反射炉の試験炉が築造される。しかし、同年 11 月、経済的事情などのため、本式の反射炉



の築造は中止された。

一方の郡司 鑄造所遺構は萩藩の代表的な鑄物師であった松本郡司家の鑄造工房の遺構だが、意外なことに鑄造されたのは鑄鉄製ではなく、時代錯誤的な青銅製であ

った。他藩や幕府が自前の鑄鉄製大砲の製造を志向する中であって、明治維新の中核となった長州藩は、外国から購入する道を選択した。

## 産業 2

山口県の瀬戸内側は、江戸期に多くの塩田が開かれたが、その遺構は、冒頭で扱った塩田用の石刻橋を除くと、三田尻塩田記念産業公園内にある旧越中屋釜屋煙突（防府市、国登録）**B** もユニークな残存事例である。煙突そのものは明治末期から大正初期にかけて造られた近代化遺産だが、煙突を積むのに使われた石材が塩田釜屋内（江戸中期起源）で使用された石釜石材の再利用であった。

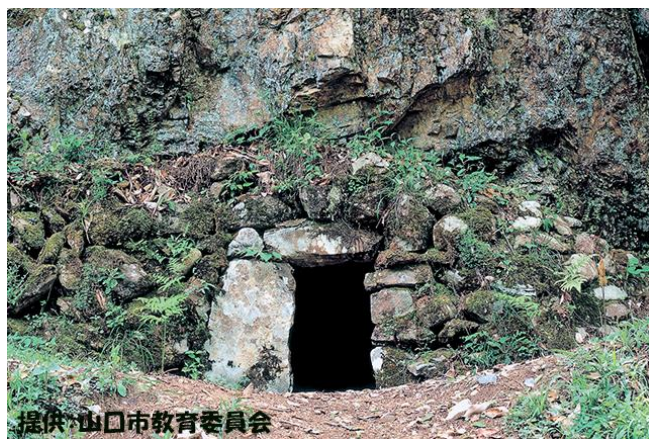


事例である。煙突そのものは明治末期から大正初期にかけて造られた近代化遺産だが、煙突を積むのに使われた石材が塩田釜屋内（江戸中期起源）で使用された石釜石材の再利用であった。

## 衛生 1

上記、**林業**の項で述べた重源による東大寺用材の

切り出しにあたり、人夫の疲労回復のために造られた石風呂が佐波川沿いに2基、また、重源が滞在した阿弥陀寺には施湯のために造られた石風呂が1基残っている。いずれも、文治2（1186）頃造られたもので、現存する国内最古の石風呂である。中で、最も重要なものは、林業遺産的な要素の強い佐波川沿いの野谷の石風呂（山口市、国史跡）**A** で、花崗岩を積み上げた石室上にきれいに土盛が残っている。岸見の石風呂（山口市、国重要民俗）**A** は、木造覆屋内にあり、入浴体験もできることから知名度は高いが、弘化年間（1844-47）に岸見村庄屋から藩に提出された記述によれば、覆屋はなく土盛りした上に草木を繁茂させ石風呂を保護したとあるため、幕末から近代にかけて改造されたことになる。



## 防衛 1

室積台場（光市、弘化3（1846）以前、市史跡）**B** は、台場の芯礎を赤土で盛り固め、外周を付近の海岸から採取した円礫の積石で覆った四角錐台形の構造で、現存する近世台場として他に例を見ない。女台場という別称は、郷土を守る女性や老人によって築壘されたことに由来している。

